保登家の最年少

ユウキココア

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしココアに双子の弟がいたら…

ごちうさが好きで一度やってみたかったので投稿はじめました。

初投稿作品なので至らないところもありますが温かい目で見てください。

あまり時間が取れないからひとつひとつの話が短いです＜（＿＿）＞

★がついている話は最後にキャラクター設定をつけています

目次

1話　双子の門出 ―― 1
2話　第一印象は大事★ ―― 4
3話　お姉ちゃんとラテアート ―― 6
4話　弟と居場所…？ ―― 10
5話　バタバタな入学式!? ―― 12
6話　パン魂って結局何？ ―― 15
7話　パン作り～準備～ ―― 17
8話　連絡手段とプチハプニング ―― 20
9話　パンと菌と武士魂 ―― 23
10話　看板メニューの完成 ―― 26
11話　千夜と甘兎庵と衝撃★ ―― 29
12話　インパクト抜群!! ―― 33
13話　ライバルの存在!! ―― 35
14話　もっと姉としての自覚を… ―― 37
15話　新たな出会い～いろいろ特殊な人間～前編 ―― 40
16話　新たな出会い～いろいろ特殊な人間～後編 ―― 43
17話　ラテの休日 ―― 46

1話　双子の門出

始まりというものはふつう誰でも緊張するものだろう。
しかし、僕の姉は普通とは少し違った…

「らっく～ん」
「らっくんと呼ばないでよココア」
僕の名前は保登ラテ
このうるさいのは僕の姉の保登心愛だ
「もぉ～お姉ちゃんって呼んでよ」
「お姉ちゃんって言っても早く産まれただけじゃん…」
僕とココアは双子の兄弟だ。
だがココアは何かとお姉ちゃんぶってくる。
僕とココアはこれから木組みと石畳の街にある香風さんの家に行くことになっている。
だが…ココアをみるかぎり準備が終わっているようにはみえない。

「そんなことより早くいかないの？」
「あ、まってよらっくんもう少しで終わるんだよ」
そういうとココアは、せわしなく動き出し準備を進めだした
しばらくするとココアの動きが止まった
「らっくん終わったよ～早く行こうよ」
「誰のせいで待ったと思ってんだよ…」
いろいろあったが、やっと出発できそうだ。
そう考えると緊張してきたな…
するとココアがとなりから
「どうしたの怖い顔して？」
「家を離れてホームステイするんだぞ？緊張の一つくらいするだろ。ココアは緊張してないのか？」
「緊張なんてしないよ！だってこれから新しい場所で友達をいっぱい作ることができるんだよ！わっくわくだよ」

今だけはこいつの能天気さがうらやましいよ…
普段は絶対に役に立たないけどな
そうこうしているうちに電車が出発して、木組みと石畳の街に向かった
「ねぇらっくんみてみてすっごい速いよ!それに景色もきれいだねぇ」
「みっともないからはしゃがないでくれよ一緒にいるこっちがはずかしくなるだろ」
「それってどういう意味!?」
そんなやり取りをしていると目的の場所が見えてきた
「ほらそろそろつくから荷物をまとめておけよ」
とココアに言うと「は～い」と気の抜けた返事が返ってきた。こんな調子で大丈夫か?とラテは思った。
「じゃあ香風さんの家にいきたいんだけど…」
「おねぇちゃんに任せなさ～い」
そう言ってココアは歩き出したためラテは仕方なくついていくが少し歩くと
「うっさぎ♪うっさぎ♪」
と言ってどこかに行ってしまった。そのためラテはひとり香風家である『ラビットハウス』に向かっていた。
「ったくココアのやつはどこにいったんだよ、まぁ知ってそうな雰囲気だったしだいじょうぶか?」
・
・
・
「ここがラビットハウスだな」
そういってラテは店内に入った。
「…いらしゃいませ」
そういって接客してきた小さな女の子に
「今日からホームステイすることになっている保登ラテなんですけど香風さんの家はここであってますか?」

「…はい香風はうちであってますよ。私はマスターの娘のチノです。けれどホームステイは二人と聞いていたんですけど？」
「よろしくねチノちゃん。それともう一人ははぐれてしまってもう少ししたらくるとおもうけど」
「そうでしたか、では先に奥で休んでてください」
少し経つと、さわがしくなったためでていくと先ほどどこかにいったココアがいた
「ココアやっと来たのか遅いぞ」
「あ、らっくんもういたんだねぇ」
「…それじゃあふたりそろったみたいなので早速仕事を手伝ってください」
そういわれ、チノは制服を取りに行き、ココアは更衣室に行ったため、気を使い二階で着替えることにしたラテはチノにそのことを伝え二階に向かった

2話　第一印象は大事★

僕はチノちゃんから制服を受け取ると、制服に着替えてから鏡で自分の姿を確認した。
「制服の色はこげ茶色かな？お店の雰囲気ともあってそうだけど似合っているかな。後でココアにでも聞いてみようかな？…いやココアだと参考にならないし何も言わないでも感想を言ってきそうだな、まぁふたりを待たせたらいけないしそろそろ下に降りようか」

リゼｓｉｄｅ
さっきも突然入ってきたココアにびっくりしてあんなことをしてしまったが控えた方がいいのだろうか…

でも本当に泥棒とかだったらやばいし、何より反射でしてしまうからな…でももうココアはチノから説明してもらったしさすがにもう間違えないだろう。
とりあえずココアもチノももうすこし時間がかかりそうだから店の準備でもして待っていようか
リゼｓｉｄｅｏｕｔ

【ガチャ】
「誰だ！」
「えっ!?」
ど、どうしようお店に戻ったら知らない女の子に銃構えられたんだけど？てかあれってモデルガンだよね？「本物でした」みたいなこと起きないよね（汗
「おいお前なぜ店の奥から出てきたんだ、まさかスパイかっ！」
「ええっと、きょ今日からここでお世話になるラテというものです！」

「リゼちゃんなんか騒がしいけどどうしたの～」
「ん？ココアか、この奥から怪しい男が出てきたから問い詰めているところだ」
「怪しい男ってらっくんのこと？」
「そうだがココアの知り合いか？」
「うん！私の弟で一緒にラビットハウスにホームステイするんだよ」
　よかったタイミングよくココアが来て女の人に僕の説明をしてくれているみたいだ。ちなみにココアが説明している間も銃口はこちらに向いているためハンズアップ状態だ
「ココアから事情はきいたぞ。そういうことなら早くいってくれよな焦るだろ？」
「いきなり銃向けてくる奴に説明なんてしても意味ないだろ。それに焦るのは僕の方だろ」
　こんなことがあったためか少しぶっきらぼうに答えた
「今度から気を付けるから機嫌を直してくれよ～」
「そうだよらっくん。間違えなんてよくあることだからちゃんと仲良くするんだよ」
「わかったよ。僕たちのこともちゃんと伝わってなかったみたいだしもうこれ以上は言わないけど今度から気を付けてよ」
　するとチノが来てからリゼがここのバイトの先輩だと伝えた
「それじゃあリゼさん先輩としてふたりに仕事のことを教えてください」
「教官というわけだな！」
　…すごくうれしそうだな。少し珍しいけどそういうのが好きなのかな？
「よろしくね、リゼちゃん」
「上司に口を利くときは言葉の最後にサーをつけろ！」
「お　落ち着いてサー！」
　この感じ絶対に好きだな…

3話　お姉ちゃんとラテアート

「それでは3人でこの荷物をキッチンまで運んでください」
「りょーかい」
　この荷物少し重そうだな…と考えているとココアが荷物のひとつを持ちながら
「お、重い…これは普通の女の子にはきついかも」
「まぁ少し重いしあまり無理をするなよ。言ってくれればちゃんと手伝うから」
「らっく～ん、ありがとー！こんなだめなお姉ちゃんでごめんね～」
　そんな会話をしていると前から『ドスン』と音がしてため前を進んでいたリゼに近づいて
「どうしたなにかあったのか？」
「い、いや普通の女の子には重いって…」
「なんだそんなことか、別にそんなこと気にしなくてもいいだろ。持てないやつもいれば持てるやつもいるそんなものじゃないか？」
「そういうものなのか？相談に乗ってくれてありがとなラテ」

　そんなやり取りをしているうちにキッチンに荷物を運び準備がしてから店に行くとリゼから
「ふたりともメニューを覚えといてくれよ」
　とメニューを渡された
「コーヒーの種類が多くて覚えるの大変そうだね」
「たしかに、こうしてみると結構種類があるんだな」
　いままでコーヒーにあまり興味がなかったためかよりそう感じるな
「私は一目で暗記できたぞ」
　この量を一目で暗記できるのはすごいな…
「ちなみにチノは香りだけコーヒーの銘柄が分かるぞ。…まぁ砂糖とミルクは必須だがな」
「すごいけどなんか安心したよ」

とココアが言っているが普通にすごくないかな?それに砂糖とミルクでそこまで変わるものなのか?
「それにしてもチノちゃんは何をしているの?」
「宿題です。空いた時間にするようにしているんです」
「チノちゃんはえらいなぁ。ココアも少しは見習っとけよ」
「うっ。あっチノちゃんそこの答えは１２８だよ。その隣は３６７だよ。はぁ、私も何か特技が欲しいよ」
そんなすぐに計算できて何を言ってるのだか…
「ココアは昔から計算だけは早かったんだよ」
そうこうしているうちにラビットハウスにお客さんがやってきた。
「いらしゃいませ♪」
「おや?新人さんが入ったのかい?」
「はい今日から働かせて頂くココアと向こうにいるのが私の弟のラテって言います。」
「ちゃんと接客できているじゃないか」
「心配ないみたいですね」
「みんなー私ちゃんと注文とれたよ～」
「いちいちそんなことではしゃぐなよ見てるこっちが恥ずかしいだろ」
「よしふたりともラテアートしてみないか?」
「ラテアートかぁそれって難しそうだけどそんな簡単にできるものなの?」
「簡単にできるかわからないけどコツさえつかめば案外できるものだぞ」
ココアの方を見ると見るからにわからないって顔をしているな…
「ココア、ラテアートっていうのはミルクの泡でコーヒーに絵を描くことだ」
「見本としてはこんな感じだな」
「わぁリゼちゃんすご～い!上手だね!もっかい作って」
「しょうがないな!特別だぞ。やり方もしっかり覚えろよ!」
「リゼこれを初心者に見せるものじゃないぞ」

「リゼちゃんこれはもう人間業じゃないよ…」
　というとココアもラテアートの準備を始め、作ったが少しイメージと違うものができったぽいな
「もぉ～！チノちゃんとらっくんもラテアートしてよ」
「俺は遠慮しておくよ。また別の機会にな」
　ところでチノちゃんのラテアートはどんなものか気になるな
「…できました」
「え～っと、これは…ある意味天才的なのか？」
「ココアこういうのはあまり比べない方がいいぞ」
「じゃあ今日はそろそろお店を閉めましょうか」
「じゃあ僕は二階で着替えてくるよ」

　二階で着替えていると男の人が話しかけてきた
「…君がラテ君か、よろしく。チノの父親のタカヒロだ」
「よろしくお願いします、お世話になります」

　下に降りるとココアとチノちゃんが夕飯を作っていた
「ラテさん今日はシチューを作るのでお皿の準備をお願いします」
　その後食事を済ませてから部屋でゆっくりしていると
「らっくんお風呂に入っていいよ」
「ココア…ノックくらいしてから開けようや」
　それじゃあお風呂に行こうかな

――――風呂から上がる――――

　ん？あれはココアか？こんな時間に何してるんだろう
「お～いこんな時間に何してるんだ？」
「らっくん、昼間にしたラテアートの練習してるんだ！リゼちゃんにも送ったけどこんなにうまくなったよ。でもチノちゃんを驚かせた

いからもう少し作ってから寝ることにするよ」
「ひとりじゃ飲める量に限界がおるだろ？僕もできたラテアート飲んであげるよ」
　そうしてラテアートを作って飲むのを繰り返してからしばらくするとココアが眠ってしまったためココアを部屋におくっていたらココアが寝言を言いだした
「らっくん今日はありがとねぇＺＺＺ」
「そこまで一生懸命できるのは正直すごいよ」
　そしてココアを部屋に連れていきベッドに寝かせた。
「おやすみ、お姉ちゃん。お疲れ様」

４話　弟と居場所…？

僕はココアを部屋に送った後自室に戻り、眠ろうとしていたが…
「ココアのラテアートを飲みすぎたのかな？まったく眠くないな」
水でも飲もうかと下に降りた僕は店の明かりがついていることに気づいた。
「そういえばタカヒロさんが夜の時間にバーをやってるみたいなことを言ってたな」

ｓｉｄｅｏｆｆ

「タカヒロよおぬしはあのふたりのことをどう思っているのじゃ？」
「あのふたりか…チノとうまくやってくれるんじゃないのか？」
「そうかもしれんがチノのことだからあの小僧のことで変に緊張するんじゃないかのぉ。ただあの娘はすぐ抱き着いてくるからこっちも困るっていうか…今はあれじゃけどもともとはアレだし…」
「楽しくなりそうじゃないか親父」
そのような会話をしていると店にラテがやってきた。

ラテｓｉｄｅ

正直僕がここにいてもいいのだろうかと少し考えていた。
というのも僕以外に男がタカヒロさんしかいないので気が引けるし、チノちゃんもよく知らない男と一つ屋根の下というのも思うところがあるのではないかと考えてしまう。
その時タカヒロさんが店にいるのが見えたので、そのことについて何も考えていないのだろうかと思い少し話を聞こうと思った。
「タカヒロさん少しお話いいですか？」
「別に構わないがどうかしたのかい？」
「この家に男である僕までホームステイをしてもいいのかと疑問に思って…そのことを何考えているのか聞きたかったんです」
「そんなことだったのか。それなら気にしなくてもいい？」
そんなお気楽な考えでいいのか？と失礼にも思っていると
「ひとつ俺の持論をラテ君に教えてあげよう。そんなことまで考える

ことができる人は相手の気持ちになることができる人なんだよ」
僕はそのように考えたことがなかったため改めてタカヒロさんがすごい人だと思っていた。すると、続けて
「だから、こちらとしても娘のチノをふたりに任せることができる」
この時僕は、すごく信頼してくれているな、と思うと同時に裏切りたくないなと心の底から思った。
「ありがとうございます。相談したおかげで気持ちが楽になりました」
「それならこちらとしてもよかったよ。これからもチノと仲良くしてやってくれ」
それから、少し話をしてから「明日のこともあるので自分の部屋に戻ります」と言って自室に戻った。
ｓｉｄｅｏｆｆ
「な、だいじょうぶそうだろ？親父」
「まぁあそこまで人のことを考えるのは普通出来ないじゃろうな。それにあの娘がいたら仲良くなるかもなぁ。チノに必要なのはあのようなタイプかもしれんな」
そうしてラビットハウスの夜は更けていった

5話　バタバタな入学式!?

僕は、明日から学校なので今日の朝はゆっくりする予定でいた。
そう考えているとココアが学校に向かったとタカヒロさんから聞いたので街を見て回るついでにココアを探していた。
しばらく歩いているとココアが道でウサギを抱いているのが見えたので声をかけた
「こんなところで何してるんだココア」
「らっくんこんなところで何してしてるの！早く学校に行かないと！」
「えっ!?ちょっココア～！」
ココアは学校が今日だと勘違いしたままで早く学校に行こうとしていたが途中でウサギの群れと一人の女の子がいる公園についた。
公園にいる女ｓｉｄｅ
食べないわねー、うちの子は食べるのに。
「あら？」
公園にいる女ｓｉｄｅｏｆｆ
ココアは知らない女の子と一緒のベンチに座って栗ようかんを食べていた
「ココアその栗ようかんどうしたんだ？」
「この子がくれたんだよー」
「そういえばその制服…私と同じ学校ね」
「あ、そうだ学校！遅刻しちゃうよ！」
そう言ってその子の手を取ってココアはまた走り出した。しばらくするとココアはまた同じ所に戻ってきたところで今日まで休みで明日が入学式だと伝えた。
「ココアが迷惑かけたみたいでごめんな。僕の名前は保登ラテっていうんだよろしく」
「ココアちゃんとラテ君っていうのね、私は宇治松千夜よよろしくね」
「千夜ちゃんこの栗ようかんどこに売ってるの？すっごくおいしい」
「何個食べているんだよココア、そのようかん元は千夜のなんだろ？

遠慮しとけよ」
「いいのよ別に。それにそれは私の手作りなの。それに、その和菓子は特に自信作…幾千の夜を往く月…名付けて【千夜月】 栗を月に見立てた栗ようかんよ」
「千夜月？なんかすごい名前だな…」
「そうだ！ふたりが道に迷わないようにいまから高校の方に行きましょうか」
　そういって僕たちが通う高校まで千夜の案内で向かっていた
「あそこに見えるのがこれから通う高校よ」
「ココアちゃんと道をちゃんと覚えたか？」
「もうお姉ちゃんを馬鹿にしすぎだよぉ～」
　そのような何気ない会話をしていると突然千夜が
「ごめんなさい、ここ私が卒業した中学校だったわ」
「「えっ」」
　その学校をよく見ると確かに中学校の文字が見える…
　千夜ってもしかして抜けているのかな？
「私たちが通うのはこっちだったわ」
「千夜ちゃんはおっちょこちょいさんだね」
「ココアも人のこと言えないだろ」
　時間を見ればいい時間だったのでここで解散になった。帰っている途中でチノちゃんにあった
「チノちゃんおかえり～」
「ココアさん高校はどうでした？」
「この街の建物は私たちが暮らしていたところと違って迷っちゃうよ」
「そうですか。ところで高校はどうでした？」
「まるで童話の中みたいだね」
　…ココアのやつ露骨に会話を変えようとしているな
「高校は…」
「それ以上聞かないで!!」
　ココアがチノにいじられている？間にさんにんはラビットハウス

について

6話　パン魂って結局何？

今日は高校の入学式だったクラスはなんと、ココア、僕、千夜が同じクラスになった
ラテ「それにしても、3人が同じクラスになったのはすごい偶然だったな」
ココア「もうこれは偶然を通り越して運命だよ！」
ラテ「運命は大げさすぎないか？」
千夜「でも私はみんなと同じクラスになれてうれしいわ」
みたいな会話をしながら帰っているとパン屋が目に入った
ラテ・ココア「いい匂いだな（だね）」
千夜「パン屋みたいね」
ココア「…かわいい」
…ココアが変なことを言い出した
千夜「パンが？」
ラテ「僕とココアの実家がパン屋をやっているんだ」
千夜「そうなの？すごい！」
ココア「パンを見ていると私の中のパン魂が高ぶってくるんだよ！」
…パン魂ってなんなんだ？
千夜「わかるわ！私も和菓子を見ていたらアイデアがわいてくるの」
ココア「千夜ちゃん和菓子作るの好きなんだよね。あの時食べたようかんもすごくおいしかったよ！」
ラテ「え、そうなのか僕も食べてみたいな」
千夜「でも何よりも好きなのは…できた和菓子に名前を付けることなの！」
ラテ「名前ってあのへんなやつか？」
ココア「らっくん！変なのとか言ったらだめでしょ！」
ラテ「それもそうだな。ごめんな千夜」
千夜「別に気にしてないわよ」

ラビットハウス内にて
ココア「でもこの街にもパン屋ってあったんだね全然気づかなかったよ」
ラテ「まぁこの街に来たばっかだしそういうもんじゃないか？」
ココア「でもパンを見ていたら私もパンを作りたくなるよ」
ラテ「さすがに無理じゃないのか？」
チノ「何の話をしてるんですか？」
ラテ「この街にパン屋があったからそのことについて話してたんだよ」
ココア「チノちゃんこの店でパンって作れないの？」
チノ「大きいオーブンならありますよ」
ココア「ほんと！」
チノ「昔、おじいちゃんが調子乗って買ったのが」
ラテ「すごい言い方だな…」
ココア「じゃあみんなで看板メニューを開発しない？焼きたてのパンはおいしいよ」
リゼ「話ばかりしてないでちゃんと仕事しろよ！」
するとリゼのおなかの音が聞こえた
ラテ「リゼおなかへってんのか？」
ココア「焼きたてっておいしいんだよ」
リゼ「う、うるさい！そんなことはわかっている!!」
ラテ「じゃあ今度の週末にでもみんなでパンを作るか？」
ココア「いいね！そうしようよ！」
ラテ「じゃあ各自パンの中に入れたいもの用意してからぱんをつくろうぜ。リゼとチノちゃんもそれでいい？」
チノ「私は大丈夫です」
リゼ「私もそれで大丈夫だ」
こうしてみんなでパン作りの計画が練られていった

7話　パン作り～準備～

～翌日の学校にて～

ラテ「ココアどんなパンを作るか決めた？」

ココア「決めたよ～。あっ、でも当日まで秘密だよ」

そのような話を昼休みにしていると

千夜「何の話をしているの？」

ココア「あのね、今度ラビットハウスでパンをみんなで作ることになったんだよ」

千夜「あら、そうなの？」

ラテ「よかったら千夜も一緒に作るか？」

千夜「私も参加していいの？」

ココア「全然大丈夫だよ。千夜ちゃんも一緒にパン作ろうよ」

千夜「じゃあ参加させてもらうわ」

ラテ「それなら週末にパンの中に入れたいものを用意してからラビットハウスに来てくれるか？」

そんなこんなで昼休みを過ごした。ちなみに席はココアと僕が窓際の後ろに隣同士、少し離れて千夜といる席関係だ

ココア「ここの席すごいあったかいねぇ」

ラテ「確かにちょうど日差しが入ってくるからな。ってもう寝てるし…」

それにしてココアのやつ気持ちよさそうに寝てるな。なんかココアを見てたら眠気が…

千夜ｓｉｄｅ

パン作りに入れるもの何にしようかしら？ココアちゃんとラテ君はもう決めたのかしら？

あら？ココアちゃんもラテ君も寝てるみたいね。こうしてみるとほんとに双子っていうのがわかるわ

千夜ｓｉｄｅｏｆｆ
ラテ「ココアの顔見てたら授業中寝てしまった…」
ココア「えぇ～わたしのせいなの!?」
千夜「二人とも寝てるときはほんとにそっくりだったわよ」
ココア「え！ほんと！えへへ」
ラテ「それってうれしいのか？」
そういいながら学校から帰っているとスーパーが見えたので
ラテ「じゃあ僕はスーパーによっていくから先に帰ってて」
ココア「スーパー？何か買うの？」
ラテ「あぁ、パン作りで使うものを買おうと思ってね」
千夜「何にするかもう決めたの？」
ラテ「当日まで秘密だぞ？それじゃ」
ふたりと別れた後に僕が入れようとしているものを買った
ラテ「あとは…インスタントドライイーストがあるな。忘れないうちに買っておこうかな」

ラテ「ごめんパン作りの準備してたら遅れた」
リゼ「それは構わないけどそんなに準備するものがあるのか？」
ラテ「けどもう大体終わったからみんなはパンに入れる材料だけでいいよ」
チノ「それはとても助かります」

～～仕事後～～

ラテ「そうだココア」
ココア「ん？どうしたの」
ラテ「今日買い物したときドライイーストがあったから買ってるからね」
ココア「ありがと～さすがらっくん。お姉ちゃんがなにかしてあげようか？」

ラテ「別に何もしなくていいよ、してほしくてやったわけじゃないし」
ココア「もう、照れなくていいのにぃ」
ラテ「別に照れてなんかないし。とにかくそういうことだから！おやすみ」

８話　連絡手段とプチハプニング

ｓｉｄｅｏｆｆ

ジリリリリリピッ
パン作り当日の朝に鳴り響くアラームの音。
ラテ「ふあ～あ。今日はパン作りだからその準備でもしておこうかな」
と言いラテがベットから出ようとすると「んん」という声が隣から聞こえた。
ラテ（え!?誰かいるのか？）

ラテｓｉｄｅ
なんで僕のベットにココアがいるんだよ？はぁ、とりあえず起こそうか
「ココア起きろ」と言いながら頬を引っ張った
どうしてこうなったんだ…

回想〈二日前〉
リゼ「ラテとココアは携帯持ってないのか？」
ラテ「どっちも持ってないけどいきなりどうしたんだ？」
リゼ「パン作りのするってなった時から思ってたんだけど携帯がないと連絡を取り合うのに不便だと思ってな」
ラテ「確かに、チノちゃんはともかくリゼの場合はちゃんと合わないといけないし突然のことは連絡取りづらいからな」
リゼ「それにこれからのことも考えたらあった方がいいんじゃないか？」
ラテ「それもそうだな、じゃあ明日ココアと見に行ってくるよ」
リゼ「それだったら、この店に行ったらいいぞ。」
ラテ「この店だと何かあったりするのか？」
リゼ「この店がこのあたりで一番近くて今新規のサービスをしてい

るんだ」
ラテ「それは助かるよ。ありがとう」

〈一日前〉
ラテ「それじゃあ携帯を見に行こうか」
ココア「は～い」
ラテ「ところでココアはどんな携帯を買うか決めたのか？」
ココア「うん！決めてるよこのピンクの携帯にするつもりだよらっくんはどんなのにするの？」
ラテ「僕は、茶色の携帯にするつもりだよ」
ココア「あっ、私と色違いだね～やっぱり私たち双子だね～」
ラテ「おおげさだな～たまたまだよきっと」
ココア「もうらっくんロマンがないよ。もっと楽しくいこうよ」
そのような会話をしながら携帯ショップに向かった
ココア「みてみてらっくん、いろいろな携帯が売ってあるよ」
ラテ「携帯ショップなんだから当然だろ…そんなことより静かにしてないとほかの人に迷惑になるだろ」
ココア「そのくらい言われなくてもわかってるよ～」
店員「いらっしゃいませ。本日はどのような御用でしょうか？」
ラテ「新規で携帯を契約するとサービスされるって聞いたんで来たんですけど」
店員「契約する携帯はいくつですか？」
ラテ「二つでお願いします」
店員「種類などは決まっていますか？」
ココア「これのピンクと茶色で！おそろいなんだ～」
店員「わかりました少々お待ちください」
店員が在庫を取りに行ってるときに
ラテ「さすがにおそろいは言わなくていいだろ」
ココア「えへへ」
そのあと契約をしてからラビットハウスに帰った

回想終了（冒頭へ）
ココア「おふぁおうらっくん。どうして私の部屋にいるの？」
ラテ「逆だよなんでココアが僕の部屋にいるんだよ」
ココア「へ？あっ、思い出した」
ラテ「何かあったのか？」
ココア「昨日携帯がうれしくて眠れなくなったからチノちゃんのところに行ったら、「もう寝ますから、ラテさんのところに行ってください」って言われたんだよ」
ラテ「それって、体のいいように断られてるだけじゃないか？」（ボソッ）
ココア「それからららっくんの部屋に行ったらららっくんがもう寝てたから「ねぇらっくんなんかしようよぉ。眠れないよ」って言ったららっくんが「眠いからやだ」言うから「じゃあ一緒に寝てもいい？」って聞いたら「勝手にしろ」って…」
ラテ「いや寝てたんなら起こすなよ」
ココア「だって～」
ラテ「まぁ過ぎたことをあまり言うつもりはないけど次から気を付けてくれよ」
ココア「は～い」
ラテ「じゃあパン作りの仕込みをしに行こうか」

9話　パンと菌と武士魂

朝からいろいろあったが無事に全員そろいパンを作ることになった

ココア「みんなに紹介するね。私とらっくんのクラスメイトの千夜ちゃんだよ」

チノ「よろしくお願いします千夜さん。ここのマスターの孫のチノと言います。いつも学校で二人がお世話になってます」

ラテ「チノちゃんはお母さんみたいなこと言うね…」

リゼ「よろしくな千夜。私はリゼっていうんだ」

千夜「こちらこそ今日はよろしくね。チノちゃん、リゼちゃん。ところで、チノちゃんの頭にいるワンちゃん…」

チノ「これはワンちゃんじゃなくてティッピーです」

ラテ「さすがにワンちゃんには見えないだろ…」

ココア「この子はただの毛玉じゃないんだよ。もふもふぐあいが格別なの！」

千夜「まぁ、癒しのアイドルもふもふちゃんね」

チノ「ティッピーです」

リゼ「誰かアンゴラうさぎって品種だって教えてやれよ」

ラテ「リゼあきらめろ、あの三人に説明は無理だ」

リゼ「大体察したよ、おまえも大変だな」

ラテ「それを言うなよ…」

リゼ「お前たちそのくらいにしてそろそろ始めないか？」

ココア「それもそうだね」

リゼ「でもココアがパンを作れるのは意外だったな」

ココア「みんなパン作りをなめちゃいけないよ！少しのミスが完成度を左右する戦いだよ」

リゼ「(ココアがめずらしく燃えている…！)今日はお前に教官を任せた！よろしく頼む！」

ココア「まかされたよ！」

リゼ・チノ「暑苦しいな（です）」
ラテ「じゃあみんなが用意した材料を出してくれ」
ココア「私は新規開拓の焼うどんパンを作るよ」
千夜「私は自家製のあずきと梅と海苔を持ってきたわ」
チノ「冷蔵庫にいくらと鮭と納豆とゴマ昆布がありました」
リゼ「私はイチゴジャムと…マーマレード…これってパン作りで合ってるよな…」
ラテ「僕はココアパウダーでココア味のパンを作ろうと思ったんだけど…リゼ以外パン作る気ないだろ」
ココア・チノ・千夜「そんなことないよ（わ・です）」
ココア「まぁそれは置いといて、今日はドライイーストを使うよ」
チノ「それは食べても大丈夫なんですか？」
ラテ「チノちゃんドライイーストは酵母菌と言ってパンをふっくらさせるんだよ」
ココア「私が教えようとしてたのに～」
チノ「（攻歩菌!?）そんな危険なもの入れるくらいならぱさぱさのパンで我慢します」
ラテ「チノちゃん何か勘違いをしてると思うけど酵母菌は全然危険じゃないよ」

～パンをこねています～

チノ「パンをこねるのって時間がかかるんですね、少し疲れてきました」
千夜「腕が…もう動かないわ…」
チノ「リゼさんは…大丈夫そうですね」
リゼ「まて、なぜそう思ったチノ？」
ラテ「二人ともつらくなったら変わるから無理しないでね」
千夜「ありがとうラテ君。でも大丈夫よ」
ココア「けなげってやつだね千夜ちゃん」
千夜「（ラテ君の手を煩わせるわけには行かないわ。みんなについ

て行けるってところを見せないと）ここで折れたら武士の恥ぜよ！息絶えるわけにはいかんきん！」

ラテ「武士の恥？いかんきん？千夜すごい言葉つかうな」

チノ「け…けなげとは…」

１０話　看板メニューの完成

千夜「ところでみんなはどんな形のパンを作るの？」
チノ「私はおじいちゃんにするつもりです。小さいころによく遊んでもらったので」
ラテ「孫思いのいいおじいちゃんだったんだな」
千夜「おじいちゃんっこだったのね」
チノ「コーヒーをいれる姿はとても尊敬していました」
ココア「みんなーそろそろオーブンに入れるよー」
チノ「では…これからおじいちゃんを焼きます」
ラテ「結構えげつないこと言うんだな…」
ココア「リゼちゃんはウサギのパン!?」
リゼ「焼けた後に顔を書いて完成だな」
〈仕上げ〉
ココア「無事に焼けたしここからだね」
ラテ「ココアあんまり緊張させるようなこと言うなよ」
リゼ「絶対に揺らしたりするなよ」
ラテ「あっ、パンの熱が…」
ココア「このウサギ傾いているよ！」
千夜「歌舞伎ウサギね！」
リゼ「…」
ラテ「えっと、どんまいリゼ次はうまくできるよ」
リゼ「今励まされるとよけい惨めだ」
ラテ「ごめんそんなつもりじゃなかったんだけど」
〈パン焼き（二回目）〉
ココア「チノちゃんさっきからずっとオーブンのパンを見てるね」
リゼ「そんなに楽しいのか？」
チノ「はい。パンが大きくなってます」
ラテ「僕とココアも初めは焼けているパンをずっと見ていたよ」
チノ「おじいちゃんがココアさんと千夜さんのパンに抜かされてしまいました」

千夜「おじいちゃんもがんばって～」
チノ「リゼさんだけ出遅れていますもっと頑張ってください」
リゼ「私に言うなよ」
チノ「ところでラテさんのパンは焼かないんですか？」
ラテ「焼き時間とかが変わってくるからねみんなのが焼きあがったら焼くよ」
ココア「千夜ちゃんおもてなしのラテアートだよ」
千夜「まぁ、ありがとうココアちゃん」
ラテ「それにしてもココアもだいぶうまくなったな」
ココア「今日のは私の自信作なの」
千夜「じゃあいただくわね」
ココア「あっ！」
千夜（の…のみにくい）
ラテ「（あれじゃあ千夜が飲みにくいだろうな）ココアそろそろパンの様子見た方がいいんじゃないか」
ココア「そうだねじゃあ見てくるよ」
ラテ「千夜その間に飲んどけよ」
千夜「ありがとうラテ君」
〈焼き上がり（二回目）〉
ココア「みんな～焼けたよ～早速食べようよ」
みんな「いただきます」
千夜「！おいしい」
チノ「いけますね」
リゼ「さすが焼きたてだな」
ココア「これなら看板メニューにできるよ」
ココア・千夜・チノ「このうどんパン（梅干しパン）（いくらパン）」
リゼ「どれも食欲をそそらないな…」
ラテ「リゼの言うとおりだ。どれも却下だ」
ココア「そ…そんな～」
ラテ「そういえばだれかパンをまだ焼いていたんだけど誰の？」
ココア「あっそれはね」

ココア「じゃーんティッピーパンだよ」
みんな（ココア以外）「おぉ」
リゼ「これは看板メニューにできそうだな」
ラテ「じゃあ食べてみようか」
チノ「もちもちしてます」
千夜「中は真っ赤なイチゴジャムね」
ラテ「なんかエグくないか？」
リゼ（確かにエグいな）
ココア「そうかな？」
ラテ「じゃあ僕のパンも持ってくるよ」
〈ラテのパン〉
ラテ「特に珍しくないけどココアのパンだよ」
みんな（ラテ以外）「おいしい」
ラテ「それはよかったよ。けど、チョコチップがあったらよかったかな？」
リゼ「じゃあとりあえず看板メニューはティッピーパンとラテのパンってことか？」
ラテ「そうなるかなぁ」
チノ「それなら父に相談しておきます」
〈後片付け後〉
ラテ「ほんとについていかなくていいのか？」
千夜「ええ。気持ちだけでいいわよ」
ココア「それじゃあね千夜ちゃんまた学校で」
千夜「そうだ。今日パン作りでお世話になったお礼に家の喫茶店に招待するわ。時間があるときに遊びに来てね」
チノ「わかりました。みんなで行きます」
千夜「場所は後でココアちゃんとラテ君に伝えておくわ」

11話　千夜と甘兎庵と衝撃★

パン作りをした日の翌日の学校でラテとココアは千夜と話をしていた

ラテ「なぁ千夜、僕たちと連絡先交換しないか？そうしたら昨日のパン作りみたいなときに誘いやすいだろ？」

ココア「そうだよ！千夜ちゃん交換しよ」

千夜「また誘ってくれるの？うれしいわ」

ラテ・ココア「友達なんだから当たり前だろ（だよ）」

そう言って三人は連絡先を交換してから千夜にチノとリゼの分の連絡先も教えていた。

※二人には事前に了承を得ております

それから話の話題は今度教えてくれると言っていた千夜の家のことに変わった

ラテ「なぁ千夜の家って喫茶店って言ってたけど、どんなところなんだ？」

ココア「あ、それ私も気になる！」

千夜「私の家は甘味処をやっているの」

ココア「あまみどころ？」

ラテ「簡単に言ったら和風の喫茶店ってとこだ」

千夜「ラテ君の言う通りよ。場所は今言ってもわからないと思うから夜にメールで大体の場所を教えるわね♪」

～夜にて～

明日の学校の準備が終わりラテは自室でくつろいでいた。すると、

バン!!

と大きな音をさせて扉が開いた。

ラテ（びくっ）

ココア「らっくん千夜ちゃんから連絡来たよ～!!」
ラテ「とりあえずノックくらいしてくれ。突然は心臓に悪いよ…」
ココア「ご、ごめん」
ラテ「ところで千夜から連絡が来たって？」
ココア「そうだよこんなメールが来たんだ」
そういうとココアはラテに自分の携帯を見せた

千夜「ココアちゃん夜遅くにごめんなさい今日の昼に話していた家の場所を教えるわね。○○のお店を右に曲がって突き当りを左に曲がって少し進んだところにある【甘兎庵】っていうお店が私の家よ。ラテ君にも教えておいてくれないかしら？」

ココア「ねえらっくん、○○のお店ってどこにあるんだろう？」
ラテ「僕もわからないけどチノちゃんやリゼが一緒だから大丈夫じゃないか？後このメールをチノちゃんにも見せてあげて」
ココア「わかった！さそっく行ってくるよ！」
そう言い残しココアはラテの部屋から出て行った
ラテ（騒がしい奴だな）
そう思いながらラテは眠りについた

～週末～
ラテたち四人は甘兎庵に向かっていた。
ラテ「それにしてもリゼたちが道を知っていて助かったよ」
リゼ「ずっとこの街に住んでいるからな。喫茶店の名前は甘兎庵だったよな」
チノ（ティッピー）「甘兎とな!?」
ココア「チノちゃん甘兎庵のこと知っているの？」
チノ「おじいちゃんの時代のライバル店だったと聞いています」
ラテ・リゼ（明らかにチノちゃん（チノ）の声じゃなかったような

…)
チノが甘兎とラビットハウスの因縁?を話していたら四人は甘兎庵に到着した
チノ「看板がとても渋いですね」
ココア「おれ…うさぎ…あまい?」
リゼ「甘兎庵って書いてあるんだよ。それと▪おれ▪じゃなくて▪いおり▪って読むんだよ」
ラテ「ココア…帰ったら勉強しような?」
ココア「二人ともそこまで言わなくてもいいじゃん!」
チノ「そんなことより早く中に入りましょう」
中に入ると和服を着て接客をしている千夜がいた。千夜はこっちに気づいて近づいてきた
千夜「みんな!いらっしゃい!」
ココア「その服会った時にも着ていたね!制服だったんだ!」
千夜「ええそうよ。お仕事でお得意様に配達をしていたの」
ラテ「ココアがようかん食べたけど良かったのか?」
千夜「大丈夫よ。もともと配達が終わった帰りだったから」
ココア「あのようかんすごくおいしかったよ!三本もいけちゃった!」
リゼ「三本!?まるごといったのか?」
するとココアが全然動かない甘兎庵の看板兎のあんこを見つけチノが近づくとあんこはティッピーを追いかけてどこかに行ってしまった
ラテ「あんこが出て行ったよ!?」
リゼ「縄張り意識があったのか?」
千夜「違うわ、あれは恋ね。それとちゃんと戻ってくるから心配しなくていいわよ」
ココア「あれ?ティッピーってなんとなくオスと思ってんたんだけど…」
チノ「ティッピーはメスですよ」
ラテ・ココア・リゼ「えっ!!」

このときラテはこの街に来てから一番の驚いていた…

12話　インパクト抜群!!

ラテ「とりあえずほかの人の邪魔になるしどこか席に座らないか」
千夜「それだったらこっちに座って」
千夜に案内され、四人は店のテーブルに着いた。
千夜「私もみんなみたいにラテアート練習してみたから見てくれるかしら？」
千夜はそう言うと奥に行ってしまった
ココア「どんなラテアートだろうね」
リゼ「そうだな。甘味処でラテアートってふつう聞かないからどうなんだろうな」
チノも会話をしていないが、ラテアートが気になるのかそわそわしている気がする
各々がラテアートのことを気にしていると千夜が奥から出てきた
千夜「みんな待たせてしまってごめんなさいね。これが私が作ったラテアートよ！」
そういうと千夜がラテアートをみんなに配った
千夜「かわいいのは描けなかったけど・・・北斎様にあこがれて」
ラテ「浮世絵か！すごい上手だな」
チノ「ほんとですね。もしかしたらココアさんよりうまいかもしれませんね」
千夜「まぁうれしいわ。二人ともほめてくれてありがと」
ココア「私もラテアート練習したから前より上手になったんだよチノちゃん」
リゼ「だってお前ラテアートか昼寝しかしてないじゃん…」
そして千夜のラテアートを楽しんだ四人は千夜からメニューを受け取り再び衝撃を受けた
ラテ「なぁリゼ？これは何が書かれているんだ？」
リゼ「私にもわからないな…まさか何かの暗号か？」
チノ「二人ともココアさんを見てください。これが分かるみたいですよ」

ココア「抹茶パフェもいいしクリームあんみつ白玉ぜんざいもありだな～」
ラテ・リゼ「これがわかるのか!?」
ココアの意外な特技?が分かったが肝心のメニューが分からなかったのでラテ・チノ・リゼの三人はそれぞれ別のものを頼むことにしました。
しばらくすると千夜が頼んだものを運んできた
千夜「えっとこの煌めく三宝珠がラテ君でリゼちゃんは海に映る月と星々で、チノちゃんが花の都三つ子の宝石よ」
そういい千夜は煌めく三宝珠をラテに海に映る月と星々をリゼに花に都三つ子の宝石をチノに渡した
千夜「そしてココアちゃんがこの黄金の鯱(しゃちほこ)スペシャルね」
といいたい焼きが乗ったすごく大きなパフェをココアの前に置いた
ココア「うわぁおいしそう!」
ラテ「鯱がたい焼きって無理がないか」
リゼ「その前にその量食べきれるのか?」
チノ「ココアさんなら大丈夫じゃないんですか?」
そういいながら各々が頼んだものを食べていった。
メニューが変なだけでどれもおいしくできており全員食べきることができた
ラテ「マジであの量食べきったんだな…」
リゼ「そうだな…。それにしても白玉ぜんざいすごくおいしかったぞ」
千夜「それはうれしいわ。頑張ったかいがあったわね」
三人が感想を言い合っているとココアとチノがラビットハウスと甘兎庵のコラボについて話していた
ココア「私はトートバックが欲しいなぁ」
チノ「マグカップなんかもよさそうです」
ラテ・リゼ・千夜（コラボって料理の方じゃなくて?）

13話　ライバルの存在!!

チノがあんこにそ～っと近づいているのが見えた
ラテ「なぁリゼ、チノちゃんは何をしているんだ？」
素朴な疑問を一番まともそうなリゼに聞いた
リゼ「あれはだなラテ、チノはなぜかティッピー以外の動物に懐かれないんだ」
ラテ「そうなのか…好きなものに懐かれないって辛いな…」
ふたりでそんな話をしているとココアが聞いていたのか
ココア「大丈夫!!私がチノちゃんを優しくしてあげるよ！お姉ちゃんだからね！」
ココアが意味のわからないことをいっているとチノちゃんがあんこに触りそうなところまで近づいていた
ラテ（あとちょっとだよチノちゃん頑張れ!!）
チノの指先があんこの耳に少し触れた時にココアが
ココア「やったねチノちゃん!!おめでとう」
ラテ・リゼ「ちゃんと触ってから祝ってあげろよ！チノ（ちゃん）がびっくりしてるじゃん」
チノはココアの声にびっくりしていたが何とかあんこに触ることができた
初めは頭をなでていたのだが途中からぎゅっと抱き締め、最終的に頭にのせていた
ラテ「チノちゃんはウサギを頭にのせないといけないのか？」
不思議だ。動物をなでるのはわかるのだが、なぜ頭にのせるのか？
リゼ「あれじゃないのか、普段からティッピーを頭にのせているから落ち着かないんじゃないのか？」
ココア「それにしても私たちの下宿先が千夜ちゃん家だったらここでお手伝いすることになっていたのかな？」
千夜「あら、今からでも来ていいのよ。従業員は常に募集してるわよ」
リゼ「お、よかったなココア」

チノ「同じ喫茶店ですしココアさんならやっていけると信じていますよ」
ラテ「寂しくなったらいつでも連絡しろよ」
このようなふざけた？やり取りをしていると千夜が
千夜「それじゃあ部屋をあけておくから早速荷物をまとめてきてね」
と冗談なのかそうじゃないのかいまいちわからないことを言ってきた。
するとさすがに焦ったのか
ココア「誰か引き留めてよ～」
とびっくりした顔で言ってきたので
ココア以外「あはははは～」
と笑いあったのであった。
そんなこんなで甘兎庵での時間を過ごしたラテたちが帰ろうとしたとき
ココア「昔はライバル関係だったんだよね？」
とココアが聞いていてチノが「今は関係ありません」と答えていたのだが
ラテ「お互いによりいいお店にしていくって意味でなら今もライバルなんじゃないのか？」
リゼ「たまにはいいことも言うんだなラテも」
リゼが少し気になることを言ってる気がする…
チノ「それもそうですね。これからもお客さんに喜んでもらえるように頑張っていきましょう」
ココア・ラテ・リゼ「あれ、チノ（ちゃん）の頭に乗ってるのティッピーじゃなくてあんこじゃないか!?」
チノ「ティッピ～」
最後の最後でどこか締まらないラビットハウスのみんなだった。
ティッピー「チノ～」

１４話　もっと姉としての自覚を…

みんなでラビットハウスの手伝いをしているとココアが突然
ココア「ここのカップって無地なものだよね」
と言い出した。確かにこのお店では特に凝っていないどこにでもある白いカップを使っているなぁと思っているとチノちゃんが「シンプルイズベストです」と言っていた
ラテ「確かに無地だけど落ち着いた雰囲気が出てお店とも合ってるんじゃないのか？」
ココア「だけどさぁらっくんもチノちゃんも、もっといろんなものがあったらきっと楽しくなると思うよ！」
と言いココアが「この前すごく面白いカップを見つけたんだよ！」とそのカップの絵を描き始めた
リゼ「へぇそんなに面白いものがあったのか？」
とリゼまで会話に参加してみんなでココアの絵が完成するのを待っていたのだが…
ココア「確かこんな形をしてたんだと思うけど…」
ココアが見せてきた絵はカップに穴が無数に空いており到底飲み物を飲むものとは思えない形をしていた。
ラテ「このカップでどうやって飲み物を飲むんだよ…」
リゼ「これってアロマキャンドルじゃないのか？」
あろまきゃんどる？なんだろうそれはと思っているとリゼがこちらの意図を読み取ってくれたのかあろまきゃんどるの説明をしてくれた
リゼ「アロマキャンドルっていうのはだな、癒し効果のあるアロマオイルで作ったろうそくなようなものだ。このカップはおそらくそれ専用の容器だと思うぞ」
ラテ「そうなのか！わざわざ説明ありがとなリゼ。こういうのは結構疎くてな…」
そんなことを言っているとチノちゃんが一人何か考え事をしているのが目に入った

ラテ（確かにココアの言うことにも一理あるよなぁ）
ラテ「それじゃあ今度時間のある日に新しいカップみてみたらいいんじゃないか？」

それから数日
僕たちは四人と一匹（チノ、ラテ、ココア、リゼにティッピー）で新しいカップを見に行っていた
リゼ「あの店なんかいいのがあるんじゃないのか？」
ラテ「じゃあとりあえず入ってみるか」
ほんとは僕も行っていいのか迷っていたのだが（女子ばかりという理由で）ほかのみんなから「一緒に働いているんだからラテ（らっくん）も一緒に行くんだよ！」と言われたので全員出来ている
ココア「みてみて～かわいいカップがいっぱいだよ～」
とココアがはしゃいでいると棚に頭をぶつけよろめいてしまう
ココア以外（予想を裏切らない行動…）
と思いつつココアを倒れないように支えたり棚からカップが落ちないようにキャッチしたりして一応事なきを得た

のだが
ラテ「まったくココア！なんともなかったからよかったものをけがをしていたり商品を落としたりしたらどうするんだよ！これに懲りたら…うだうだ」
ココア「ごめんなさい～（泣）反省するから説教は勘弁して～」
僕がココアに長い説教をしていた。効果はないと思うが…

リゼ「これじゃあどっちが上かわからないな」

チノ「まったくです」
その説教を聞いている二人の感想はこれだった

15話　新たな出会い～いろいろ特殊な人間～前編

ココアにしていた説教が終わり、僕たちは気を取り直してカップ選びをしていた
ラテ「それにしてもお店なだけあっていろんな種類があるなぁ」
素人が一から選ぼうとすると軽く一日かかりそうなくらいの種類や大きさがあった
ココア「ねぇみんな！このカップなんてどうかなうさぎの模様がついてかわいいよ」
そういってココアがカップを取ろうとしたときにほかのお客さんと被ってしまいなんとなく気まずい雰囲気に

なることもなくココアが顔を赤らめてもじもじさせていた
いやなんでだよ!!!
???（え～なんでこの子そんなに意識してるの～！）
チノ「このシチュエーションどこかで…」
リゼ「よく恋愛に発展するやつだな」
ラテ「それって少女漫画でよくあるやつだけど現実世界でもあるの？」
と尋ねたところリゼから「え？ないのか？」と割と本気で聞いてきたから割と乙女思考だということがわかった
リゼ「あれ？よく見たらシャロじゃないか」
どうやらリゼは顔見知りらしい。
あとで聞いてみるとどうやら同じ高校の後輩らしい
ココア「リゼちゃんって年上だったんだね～」
ココアのこの発言にシャロ以外がココアの方を振り向き
チノ・リゼ・ラテ（今更!?）

三人の心の声が同じになった瞬間である
リゼ「私たちはお店で使うカップを買いに来たんだがシャロも何か買いに来たのか？」
シャロ「私は見てるだけで十分ですので」
そういうとシャロはおもむろにカップを手に取り一人の世界に入って行ってしまったたまに心の声が漏れているのか声がかすかに聞こえる
ココア「変わった趣味してるね～」
リゼ「それお前が言うのか…」
そういえばどうしてリゼはシャロのことを知っていたのか気になって聞いてみたところシャロがこっちにきて
シャロ「私が暴漢に襲われているところを助けてもらったのよ」
ラテ「この街って暴漢なんているのか？見ないからいないと思ってたんだけど」
これから気を付けないと！と思っているとリゼが
リゼ「待て待て暴漢なんていなかったぞ!!本当は…」
シャロ「待ってください先輩ほんとのことはだめです!!!」

・・・要約するとうさぎのことが怖いシャロが動けないところにリゼが通りかかり追い払ってくれたとのこと
シャロ「うさぎがこわくてわるい!!!」
ラテ「いや…そこまでは入ってないけど…」
でも正直この街は野良うさぎとか結構いるけど大丈夫なのだろうか？
ラテ「そういえばシャロってカップに詳しいんだよね。よかったらどんなのがあるか教えてくれないか？」
チノ「コーヒーを飲む用のカップがあればそれでお願いします」
シャロ「リゼ先輩のバイト先ってコーヒーあるんですか…」
リゼ「まぁ一応喫茶店だしな」
そういうとシャロは明らかにがっかりしているがコーヒーは苦手

なのかと思っているとココアが「砂糖とミルク入れたらあまくなって飲みやすくなるよ」とアドバイスしていたが
シャロ「私は苦いのが無理なんじゃなくてカフェインを摂りすぎるとテンションが上がるみたいなの。私はわからないけど」
思ったより特殊な悩みだな…
ラテ「でもコーヒー以外もあるぞ？」
シャロ「コーヒーが売りなんでしょ？それだったらコーヒーを飲んであげないと失礼かと思って」

この子めちゃめちゃいい子じゃないか!!!

１６話　新たな出会い～いろいろ特殊な人間～後編

僕たちがシャロと話していると奥からココアやってきて携帯を見せながら
ココア「ねぇみんな～この写真のカップに入ってるうさぎかわいくない？」
リゼ「確かにかわいいが窮屈そうだな」
問題点そこなのか…
ココア「ティッピーがカップに入れれば注目度アップだよ」
チノ「別に注目されなくてもいいのですが」
ラテ「そもそもティッピーくらいの大きさだと入るようなカップないんじゃないのか？」
と僕が指摘するとチノが「こんなものがありました」とめちゃめちゃでかい器を持ってきた
ココア「ねぇねぇらっくんこれならティッピーも…」
そのようなことをココアがキラキラした目でこちらを見ていた
ラテ「確かにそのサイズならティッピーが入るだろうけどお店のものに勝手に入れるのは衛生面的にまずいんじゃないのか？」
と言ってやるとココアは「そうだよね…じゃあお店の人に聞いてくる」と店員に聞きに行った

しばらくしてココアが戻ってきて「大丈夫だって～」と言いながら戻ってきた
ラテ（なんで大丈夫なんだよ…）
なんやかんやあってティッピーをカップに入れたのだが
リゼ「なんかちがうような」
チノ「お米に見えます」
どんぶり茶碗にお米を盛ったみたいな感じになり、かわいくて癒すみたいなことはなかった
ラテ「じゃあそろそろちゃんとカップ探そうぜ」

リゼ「それもそうだな」
ココア「うーん…あっ！これなんかかわいらしくていいんじゃない？」
そのカップはうさぎの模様がしてありとてもおしゃれなのだが値段が五万円と少々高く気軽に買える値段ではなかった
シャロ「アンティークものだったらこのくらいはするわよ」
とシャロが隣で説明をしてくれた
ラテ「どんなものが安いものなんだ？」
シャロ「あっちの方は安いものが多いわよ」
そこに模様はないがしっかりとしているカップが並んでいた
しばらくそのあたりを見ているとココアが
ココア「チノちゃん、らっくんおそろいのカップ買おうよ」
ラテ「それはいいけどお金あるの？」
チノ「私物じゃなくてお店のものを買いに来たのですが」
ラテ「まぁちょっとくらいならいいんじゃないか？」
というとチノちゃんが「まったくしょうがないココアさんですね」と言いつつ嬉しそうにおそろいのカップを買っていた

そのあとリゼとシャロもおそろいのカップを買い、お店を出てラビットハウスに帰った
ラテ「この後、甘兎庵で甘いもの食べてくるわ」
ココア「えぇ～らっくんずる～い」
とココアは言っていたがついてこなかったところを見るとお小遣いが少なくなったのだろうか？
しばらく歩いていると甘兎庵の近くで
???「私がこんな家に住んでいることよー!!」
と叫び声が聞こえた。
千夜「あら？ラテ君こんなところまでどうしたの？」
ラテ「ちょっと甘いものを食べにね。ところでさっきの声は？」
そういい声の主であるシャロを見た
シャロ「あ、あなたもしかしてさっきの聞こえたの？」

シャロは顔を赤くしながらそう言い「そうよ！私が住んでるのはこのぼろい家よ!!悪い!?」と逆上しながら言ってきたから
ラテ「別に悪いなんて思ってないよ。どこに住んでいてもシャロはシャロだよ。ただこのことはみんなには黙っててるよ」
そういって甘兎庵で甘味を食べて帰った

ラテが帰った後、千夜はシャロのところに行き
千夜「ね？言ったでしょ？きっと大丈夫だって」
シャロは何もしゃべらずただうなづくだけだった

17話　ラテの休日

ラテ「え？明日シフトを休んでいい？」
チノちゃんから突然バイトを休んでいいといわれ困惑するラテ
チノ「はい。最近ずっと入ってもらってたので一度休んだ方がいいと思ったので。幸い明日はココアさんもリゼさんもバイトに入っているので」
そこまで言われるとラテに断る理由がないのでラテはおとなしく休むことにした

～翌日～
今日はバイトが休みの休日ということもあり、いつもより少しゆっくり起きた
ココア「らっくんおはよう！今日は休みだったよね？何するか決めたの？」
ココアは相変わらずいつも元気だな…と思いながらラテ今日をどう過ごすか少し考えた…が特に何も思いつかなかったので
ラテ「う～ん、特にすることもないから街を見て回ろうかな」
とりあえず千夜のところに行ってから考えるわ。と言いラビットハウスを後にした
ラテ「こうしてゆっくりするのも久しぶりだな。なにしようかな」

千夜「いらしゃ…あら？ラテ君珍しいわね一人かしら？」
ラテ「今日休みにしてもらったからね久しぶりにここの甘味を食べたくなってね」
そういいラテは甘兎庵のみたらし団子を頼むのだった
ラテ「やっぱりここの甘味はいつ食べても絶品だな!!」
千夜「そういってもらえるとこちらとしてもうれしいわ～いつでも来てくれていいのよ？」
と千夜と何気ない会話をしてから甘兎庵を後にしようとすると
千夜「そういえばシャロちゃんが公園にいるらしいから会いに行っ

たらどうかしら」
去り際の千夜の何気ない一言を聞いたラテは行き先を公園に決めて歩き出した

シャロ視点
シャロ（今日はここでバイトをするのが最後だわ）
手慣れた手つきでそんなことを考えていると
???「お！ここにいたのかシャロ」
シャロの耳にそんな声が聞こえた

シャロ視点終了

ラテは公園についてからシャロを探していると遠くに見覚えのある金髪が見えた
ラテ「お！ここにいたのかシャロ」
ラテがシャロに話しかけるとシャロは驚いた顔をして
シャロ「な、なんであんたがここにいるのよ!!」
シャロは動揺しながらラテがここにいる理由を聞いた。ラテは千夜からシャロがこの公園にいると聞いたことを話した
シャロ「なんで教えてるのよ千夜は～」
ラテ「千夜もきっとシャロのことが心配だったんだよ。それにほかのやつらはバイト中でいなかったからあんまり千夜を責めないでほしい」
シャロは赤面しながら
シャロ「そこまで言うならわかったわよ…千夜に悪気がないことくらいわかるし」
ラテ「ここに来たお詫びとしてシャロ何か食べたいものとかないか？買ってくるよ」
ラテがそういうとシャロは申し訳なさそうに小声で「メロンパン」といった

ラテ「メロンパン?どうせなら作ってあげようか?」
ラテがシャロにそう告げるとシャロの目がきらきらした。今すぐには無理だからとりあえずクレープでいいか?と言いラテは走っていった

しばらくして
ラテ「お待たせ買ってきたよこっちがシャロの分」
シャロはラテからクレープを受け取りながら「メロンパンほんとにいいの?」と聞いてきた
ラテ「もちろんだよ!遠慮はなしだよ」

次の日にラテはシャロにメロンパンを届けに行き、そこですごく喜び目をきらきらさせてるシャロを見るんだけどそれは別のお話